

助成活動実績報告書

企画名	児島湾漁民の特異性
団体名	児島湾研究会

①活動の目的について

現在の岡山南部の環境から今はすでに失われている児島湾沿岸の漁民を中心とした人々の暮らしを明らかにし、瀬戸内海の他の島嶼部とは異なる漁村の特徴について検証する。また、この結果を小学校5年生を念頭に置いた教本としてまとめる。

③この活動によって達成された成果

児島湾から瀬戸内海、さらには日本各地の沿岸漁業に視点を広げて文献にあたったことで申請者の関心が1945年～1970年代の児島湾、瀬戸内海、日本の漁業に絞られて来た。例えば、社会科の教科書では漁業についても、この時期の産業および社会の構造変化についてもほとんど触れられていない分野であるが、現在の日本を形成するとても重要な時代であり、変化であったはずだ。このことを20ページの中で子どもにメッセージすることは難しいが、試みることによって活動を続ける申請者にとっての優先順位や視点を整理できた。「なぜ」「どうやって」「だれが」は、保全の議論の大前提にするべきだが、個別具体的、意欲的には検討されずに唱えられる「自然を守ろう」というお題目は子どもたちの理解を得られないと考え、例えば児島湖周辺は、「まだ、できたばかりの水辺環境は完成していない。どんな水辺にしていきたいのか、どんな水辺の傍らで生活したいのか、願うためには色々な水辺を見て歩こう」という「希望」を今年の総合学習の中で伝えて来た。

完成した教本の中では、現在目の前にある環境（南区に広がる淡水生物生息地でもある用水路や河川など、吉井川河口周辺の希少生物生息地）が、どのようにできてきたかを繙いて知らせることができたと思う。

何千年もかけて自然が作ってきた海岸に、何百年か前に人が作った大きな湾を作って、そこに繰り広げられていた児島湾漁業は近代的漁業が始まる前に没落した。従って、児島湾漁業と現代の産業との折り合いの可能性を推測することしかできない。そして、ここに漁業で暮らす生活を再び望む世代が現れたときに、その可能性を否定しないための資料整理が、児島湾の全盛期をかすかに記憶する私たちができる仕事だと思う。

④今後の計画・展望について

手元に、依然として手元の資料は未整理の部分が多い。日本の近代史の中の内湾漁業という視点（児島湾の干潟、日本の干潟とどのように折り合いをつけていくことができたのか、できるのか）で整理していきたいと考えている。写真は妹尾呉服店での聞き取り時の模様。

